



2023年度
活動報告書



一般社団法人 torindo

<とつとつダンス> 2023 年度活動報告書

● 目次

- P. 1 はじめに
- P. 2 2023 年度<とつとつダンス>の歩み
- P. 3 <とつとつダンス>をあえて言語化してみる
- P. 4 マレーシア & シンガポール渡航期間中の活動記録
- P. 8 エッセイ (マレーシア&シンガポール)
- P. 12 鹿児島での視察とワークショップ & レクチャー
- P. 14 エッセイ (鹿児島)
- P. 16 展示報告会 2023
- P. 18 <とつとつダンス>の未来 (批評) (宮下寛司)
- P. 19 活動報告会参加者コメント (一部抜粋)
- P. 23 アーティスト・エッセイ (石田智哉、神村恵、オクイ・ララ)
- P. 24 2023 年度<とつとつダンス>参加者アンケート
- P. 25 おわりに <とつとつダンス> 2023 から見えてきたこと (砂連尾理)
- P. 23 奥付

はじめに

ダンサー・振付家の砂連尾理と torindo が行ってきた < とつとつダンス > も 15 年目になる。一つのアートプロジェクトがこれほど長く続いている例はそれほどないだろう。

< とつとつダンス > のはじまりは、2009 年、京都府舞鶴市の「特別養護老人ホームグレイスヴィルまいづる」だった。舞台公演のために砂連尾が行った滞在制作からはじまり、同施設で約 10 年間ワークショップとして継続していった。月に一度、施設に入居している高齢者、介護者に向けて砂連尾がダンスワークを行い、臨床哲学者、文化人類学者などが参加者と共にことばでひらいていく。

2019 年に新型コロナウイルス感染症流行により施設に入れなくなった以降もオンラインでワークは続行。2022 年度からはついに舞鶴（というか日本）を飛び出し、これまで培ってきた経験を、異なる文化圏の人々と共有すべく、海外での活動も開始している。

さて、今年度は、昨年度から続くマレーシアに加え、シンガポール、国内では鹿児島にもその活動を展開することになった。特筆すべきは、いよいよ本格的に認知症の方やそのご家族、介護者と一緒に行うダンスワークショップがスタートしたことにある。

昨年度のマレーシアは、初年度ということもあり、一部の施設やオンラインで認知症高齢者も含めたワークショップは行ったものの、現地の認知症ケアに関心がある方々とダンスワークショップを通じて語り合うことがメインとならざるを得なかった。今回いよいよ本格的に数多くの認知症高齢者やそのご家族、介護者と共にじっくりとワークショップを行うことができた。

シンガポールでも鹿児島でも、現地のコーディネーターたちがこちらの意を見事に汲んでくれた点大きい。シンガポールではスタジアムで行われた大規模な認知症理解促進イベントで認知症の人々とともに公開ワークショップを実施することができたし、鹿児島では特別養護老人ホームだけではなく、ホームホスピスやデイサービスなど多様な高齢者ケアの現場を訪問し、ワークショップを実施することができた。

それともう一つ。人材育成の観点からアーティスト向けのワークショップを実施し、< とつとつダンス > 的な「成果報告」の仕方を探りながら、砂連尾だけでなく関わったアーティストと共にワーク・イン・プロGRESSとしてパフォーマンスも発表することができた。この成果は次年度以降の展開に深く関わってくるだろう。

< とつとつダンス > は「ひらかれたテキスト」だと思う。かかわった全員で書き込み、新たな色が生まれる。誰かが読み、書き込むたびに内容は更新される。本報告書は現時点での < とつとつダンス > を伝えているものである。

2023年度<とつとつダンス>の歩み

2023年度の<とつとつダンス>は、海外でのワークショップ開催に加え、国内でもより継続的なワークショップ開催・交流先をつくることに注力した。

● マレーシア

期 間 8月1日～8月5日
訪問先 ティラーズ大学（セシリア・チャン講師担当先）、バガン病院、バガン病院高齢者ケアセンター、ファイブアーツセンター（アーティストとプロデューサー等によるコレクティブ）
対 象 認知症高齢者・介護者、支援者、アーティスト等
内 容 ワークショップおよびレクチャー

● シンガポール

期 間 8月7日～8月10日、9月7日～9月9日
訪問先 ニュー・ホライズン・センター（デイケアセンター）、ディメンシア・ソーシャル・クラブ（認知症者とその家族対象のアクティビティおよび情報交流会）、Zoom、アプサラス・アーツ、アワ・タンピナス・ハブ
対 象 認知症高齢者・介護者、アーティスト
内 容 ワークショップ、レクチャー、作品制作、パフォーマンス、「Family Fiesta Carnival」（シンガポール最大規模の認知症理解促進のためのイベント）参加

● 鹿児島

期 間 9月22～9月23日、11月2日～11月3日
訪問先 あおぞら東千石（サービス付き高齢者向け住宅）、ホームホスピス もくれんの家、LLさねかた（通所介護施設）、ホームホスピス あんまあの家、特別養護老人ホーム シルクロード七福神、ひらやまのお家（小規模多機能居宅介護施設）、ふぁん2テラス七福神（グループホーム）、妙行寺 門徒会館
対 象 認知症高齢者・介護者、介護・医療関係者
内 容 現地視察および意見交換、ワークショップ、レクチャー

● 東京

開催日 2023年12月2日～12月3日
会 場 東京芸術センターホワイトスタジオ（東京都足立区）
対 象 一般参加者
内 容 2023年度活動報告会。映像、テキスト展示、ワーク・イン・プログレスのパフォーマンス上演、トークセッション

<とつとつダンス>を あえて言語化してみる

今年度からはじめた試みに、マレーシアとシンガポールで行った、アーティスト向けの<とつとつダンス>ワークショップがある。ダンサーやパフォーマーといったさまざまなアーティストに<とつとつダンス>に興味をもってもらい、彼らなりの視点で認知症者、介護者とワークショップを現地で行ってもらおう。砂連尾をはじめとする<とつとつダンス>チームが行かなくても、活動が継続できる可能性を探りたかった。

ちなみに、これまで<とつとつダンス>は言語化をあえて避けてきた。哲学者や文化人類学者、医療関係者などさまざまな分野の人に、<とつとつダンス>の外縁をことばでなぞってもらってはいたが、「<とつとつダンス>とは〇〇である」という発信にならないよう注意してきた。ことばになった途端に意味が固定化され、大事な「余白」が失われてしまうことを恐れたわけだが、いざアーティスト向けのワークショップをしようとしたとき、これまであいまいにしてきた「<とつとつダンス>とは何か?」という問いに正面から向き合わざるを得なくなった。しかも、日本語でも困難なものを、たどたどしい英語で説明しなければならない。

アーティスト向けにワークショップをすると決めてから、砂連尾とともに<とつとつダンス>の構成要素を分節化し、それぞれの要素を言語化する試みが始まることになった。言語化するたびに、それらをワークショップで説明し、また修正する。その甲斐あって、いくつかのキーワードを抽出することができた。「息を合わせる」「目を合わせる」「距離をはかる」「接触」「越境する」などなど。それらを手掛かりにすることで、アーティストたちと充実したワークショップを行うことができ、報告会でのパフォーマンス形式の「成果報告」へとまずは結実した。とはいえ、これははじまったばかりの試みであり、今後も継続的に取り組むべき課題だと思っている。

豊平 豪

マレーシア & シンガポール

渡航期間中の活動記録

2023年夏、砂連尾理をはじめとする日本の制作チームがマレーシア、シンガポールに渡航。これまでと別の切り口で活動の可能性を模索するため、マレーシアで活動する現代美術家、オクイ・ララがほぼ全行程に同行した。このページでは、各訪問先での活動内容を紹介する。

● マレーシア（渡航期間：2023年7月31日～8月6日）

1 テイラーズ大学

日時 2023年8月1日
場所 セランゴール州スパン・ジャヤ
進行 砂連尾理、神村恵
参加アーティスト オクイ・ララ
コーディネーター セシリア・チャン



● AM・非公開ワークショップ

参加者 認知症の高齢者やその家族、
介護者ら、31名
内容 目を合わせる、相手の動きをまねる、
触れ合わずに相手と動きを合わせていく

参加者の感想

・目を合わせるワークショップはアジア人だから人の目を見るのは慣れなくて居心地が悪かった。相手も不快なんじゃないかなという気持ちがあった。
・触れないでお互いを感じ合うワークショップでは、触れていないのにリズムに乗ってお互いが動き始めた。わたしがリードしたわけではないし、でも相手もリードしていなかった。リズムが生まれたと感じた。

● PM・公開レクチャー、ワークショップ制作

参加者 ダンスやアートを学ぶ学生、
医療介護関係者ら、86名
内容 <とつとつダンス>の
過去の事例紹介、認知症高齢者を行う
ワークショップをつくってみる

参加者の感想

・パンデミックの後だったから、このような触れ合いがテーマになっているワークそのものの楽しさを思い出した。（介護職）
・日本の施設で働いていたが、こういう取り組みがあることは知らなかった。今マレーシアで高齢者施設を運営している。もう少し勉強したいなと思った。（施設経営者）

3 バガン病院

日時 2023年8月3日PM
場所 ペナン州バターワース
進行 砂連尾理、豊平豪、セシリア・チャン
コーディネーター セシリア・チャン
参加者 介護・医療関係者、85名



内容 グループごとのワークショップ制作と発表 & 真似してみる、質疑応答

2 高齢者ケアセンター

日時 2023年8月3日、4日

場所 ペナン州バターワース

進行 砂連尾理、神村恵

参加アーティスト オクイ・ララ、
カマル・サブラン（音楽）、
アイダ・レッザ（ダンス）

コーディネーター セシリア・チャン



参加者 認知症高齢者、介護者、USMの学生、近隣で活動するダンサーら、のべ39名

内容 <1日目> 自己紹介と簡単なワーク

<2日目> 特にルールを設けず、音楽を聴きながら

その場で自然に生まれた心身の動きに合わせて踊る

参加者の感想

- ・最初は全く話そうとしなかった父が、最後には踊っていてすごく驚いた（認知症者の家族）
- ・最初は利用者さんのフォローをしていた。アイコンタクトを始めて、わたしは一体何をしてるんだろう、向こうは何を考えているんだろうという気持ちになった。そのうちに肘を使ったり背中を使ったり、ペアになった利用者さんが動きを色々教えてくれた。（介護職）
- ・わたしはダンサーなので、最初はリードしていこうと考えていた。いつもは音を聞いて自分の記憶を呼び起こして踊ったりするのだけど、今回は相手にとって（この動きが）良いのか、嫌いなのかを感じながら踊っていた。とても良い経験になった。（ダンサー）

4 ファイブアーツセンター

日時 2023年8月5日

場所 セランゴール州クアラランプール

進行 砂連尾理、豊平豪

参加アーティスト オクイ・ララ



参加者 マレーシア在住アーティスト、15名

内容 日本の高齢化や社会課題についての説明、ワークショップの実践・制作。

細かな身体の動きや、体と心の距離についてなどの質疑応答、意見交換

● シンガポール①（渡航期間：2023年8月6日～8月11日）

1 ニュー・ホライズン・センター

日時 2023年8月7日、8日、10日

場所 ブキ・バト

進行 砂連尾理、神村恵

参加アーティスト オクイ・ララ、モハマド・ヤジズ・
モハマド・ハッサン（音楽）

コーディネーター オードリー・ペレラ

内容 似顔絵制作、音楽を使ったワーク、
介護者向けの活動紹介およびワークショップ制作レクチャー



● 非公開ワークショップ（8月7日、8日、10日）

参加者 センターに通う認知症の高齢者や
介護者ら、のべ45名

参加者の感想

- ・「目を合わせる」というワークでは、ケアでの視点が入ってなかなかうまくできなかった。「目を合わせて動きが始まる、目を合わせて出会う」という砂連尾さんの話が一体何のことなのか、考え続けていきたい（介護者）
- ・音と音楽が大切だなと思った。音を聞くと体が自然に動くので、それでみんなが同じ動きをすれば良い。その中で繋がりが生まれるのか？（介護者）

● 介護者向けレクチャー &
ワークショップ（8月8日）

参加者 ディメンシア・シンガポールで
働く介護者ら、16名

参加者の感想

- ・ゆっくり歩くワークでは、足、指、膝が普段とは違った感覚で自分に伝わってきてとてもよかった。
- ・ダンスをやっていた経験があるので、ダンスやアートの創造的な力が認知症高齢者の力になることがわかるような気がする。

2 ディメンシア・ソーシャル・クラブ

日時 2023年8月7日

場所 ティオン・バル

進行 砂連尾理、神村恵

参加アーティスト オクイ・ララ、モハマド・ヤジズ・
モハマド・ハッサン（音楽）

コーディネーター オードリー・ペレラ

参加者 地域に暮らす認知症高齢者とその家族ら、のべ46名



内容 「体の一部をくっつける」「触れないで一緒に動く」などのワークショップ。
昨年オンラインワークショップに参加していた方も参加。

参加者の感想

- ・ワークショップをやったから私とパートナーとの関係が劇的に変化したわけではない。ただ、こういったダンスで生まれる感覚をどう身につけるか、一緒にそれができる関係をどう作っていくかということが大切だと思う。今日はずっとパートナーが私を見続けてくれた。その先に何があるのかを考えたい。（昨年のオンラインワークショップにも参加したJさん）

● シンガポール②（渡航期間：2023年9月6日～9月10日）

1 アプサラス・アーツ

日時 2023年9月7日
場所 グッドマン・アーツ・センター内
進行 砂連尾理
コーディネーター オードリー・ペレラ
参加者 シンガポール在住のアーティストら、
20名



内容 これまでの<とつとつダンス>の
説明の後、<とつとつダンス>を構成する要素について解説。
それらの要素に基づきワークを実施。互いに目をあわせて動く、
目を閉じて相手と合わせて動くなど。

2 アワ・タンピナス・ハブ

日時 2023年9月9日
(作品制作：9月5日、9月8日)
場所 タンピナス地区
進行 砂連尾理、豊平豪
参加アーティスト モハマド・ヤジズ・
モハマド・ハッサン
協力 Dementia & Co.
コーディネーター ディメンシア・シンガポール



内容 二部構成。第一部ではワークショップ形式でパフォーマンスを発表。
観客席をも巻き込んで認知症の人も入り乱れて踊る。第二部では公開ワークショップ。
一般参加者とともに、手の甲に乗せたティッシュを隣の人に渡すワークなどを行った。



エッセイ

<とつとつダンス>をマレーシア、シンガポールにおいて展開する上で、重要な連携相手となった3名にエッセイを書いていただいた。セシリア・チャンにはマレーシアで、オードリー・ペレラにはシンガポールでコーディネートを依頼した。また、ドン・メンドーサはオードリーに紹介していただいたシンガポールの福祉機関職員。

マレーシア



認知症者たちは、マレーシアで差別視されるコミュニティの中でも、特に偏見に晒されています。彼らは医療モデルの枠組みにはめ込まれ、「自失している」「心を失っている」「改善されない」そして「生きた屍」とみなされます。これはマレーシアの認知症者とその家族に深刻なダメージを与え、認知症に対する偏見と誤解を助長し、多大な被害、苦しみ、そして差別を引き起こしています。

私の目標は、この差別に立ち向かい、誰にとってもよりインクルーシブな文化を作り、この背景を変えることです。しかし、この考え方はマレーシアでは非常に新しいため、広めることは困難を極め相当な労力を必要とするでしょう。<とつとつダンス>は、このインクルーシブな文化を育むためのひとつのプラットフォームになるはずだと信じています。

<とつとつダンス>がマレーシアに導入されて2年。昨年、実際の現場としては2度目となる<とつとつダンス>ワークショップを日本のチームと共に経験することができました。8月にペナンとクアラルンプールで開催されました。ワークショップには2つのカテゴリーがあり、ひとつは一般に公開されたもの、もうひとつは認知症者とそのご家族およびケア・パートナーを対象とし

たものでした。

参加者の多くが今回のワークショップをポジティブな経験として捉えていた、ということが私の気づきでした。特に認知症者のご家族からそうした感想を聞き、中でも言葉を発しない認知症者、言語でコミュニケーションをとることができない方のご家族から多くお聞きしました。<とつとつダンス>は、言語を用いずに愛する相手につながるツールです。マレーシアでは、言語が使えない人間は無視されてしまうことが非常に多いので、これは本当に心強いシステムだと思います。認知症者は人間同士のつながりを失い、人としての根本的なニーズもまた、ないがしろにされていることが多くあります。認知症の方々が積極的にワークショップに参加されているのを見て、ご家族から驚きの声もお聞きしました。ワークショップ体験の後、より穏やかに幸せを感じているようだったという意見も多くあり、これらは、ワークショップを通じて他者とつながり、人間的な体験を他者と共有するという、彼らの人としての根本的な欲求が満たされたからではないかと推測します。参加した全員からポジティブな反応があり、肯定的な感情が明確に生まれていました。参加者、特に車椅子を必要とする方々は、ダンスを通じて自身の身体性を忘れ、またダンサー（参加者）同士のコミュニケーションはお互いを思いやるような柔らかいものでした。特筆すべき点は、認知症者が動く際に見せた感情的な反応、そして複数のパートナーと踊る際に彼らの身体が自発的に取り組んでいたことです。

これらは、<とつとつダンス>が認知症にまつわる偏見に挑戦し、社会的インクルージョンを推進させる可能性をいかに内包しているかを示しています。そしてまた、<とつとつダンス>をはじめとしたダンス・プログラムを認知症コミュニティに早急に広めるべきであることを、さらに強調することでもあります。とつとつダンスでの経験は、人が互いに共有している人間性を認めると

きにこそ、思いやりと希望は存在する、という私の信念を後押しし、〈とつとつダンス〉そのものが、そうした経験でした。

セシリア・チャン（コーディネーター／マレーシア）

シンガポール



〈とつとつダンス〉をシンガポールに招聘することができ、大きなやりがいを感じました。日本や他の多くの国と同じく、私たちの国も人口の高齢化という現実と直面しています。平均寿命が延びたことで、慢性疾患や認知症などの病状を効率よく管理し、治療する必要が生じているのです。

急増する認知症者のため、シンガポール政府は国の医療福祉体制整備を急ピッチで進めています。セラピーの一環として、患者の心理面や記憶力を向上し、喜びを生み出すことが実証されたアート・プログラムも既に複数の認知症ケアセンターや老人病棟などで取り入れられています。

しかし、〈とつとつダンス〉はこれまで経験したことのない取り組みでした。

シンガポールの認知症介護団体の中枢をなすディメンシア・シンガポールの支援、熱意、そして彼らの torindo/ とつとつダンスと協力する姿勢に感謝しています。彼らの支援を受け、複数の試験的なワークショップを開催することができました。2023年8月から9月の2週間にわたり

ディメンシア・シンガポールが運営する認知症デイケアセンターで実施し、若年性認知症の方々にもご参加いただきました。また施設に勤務するケア・パートナー、そして介護者の皆さまにもご参加いただきました。

それぞれがのびのびと、関心を持って取り組めるワークショップにするため、またシンガポールでも耳にする身近な音を取り入れるため、著名な打楽器奏者であるモハメド・ヤジズ・モハメド・ハッサン（以下、ヤジズ）さんにも協力を依頼しました。彼はナディ・シンガプーラ（打楽器アンサンブル）の共同設立者兼ディレクターでもあります。ヤジズさんは以前より認知症の方へ向けたドラムワークショップを開催しており、〈とつとつダンス〉ワークショップに参加し貢献することを熱望されていました。アジアのさまざまな打楽器を持ち寄り、そのリズムカルな感性をもって砂連尾理さん、神村恵さんの動きとのセッションを実現するためのアプローチをご提案いただきました。

シンガポールで〈とつとつダンス〉プログラムをその本来の姿で開催するには、規模を拡大する必要があります。すなわち、ダンサーや振付師、ムーブメント・アーティストに〈とつとつダンス〉のメソッドを教えられるようにならなければなりません。これを念頭に、シンガポールのパフォーミング・アーティストを対象としたとつとつダンスワークショップも開催しました。この試みは、どれほどのアーティストがこのメソッド、そして認知症者との関わりに興味を持っているのか、そもそもそうした興味が存在するのかどうか、私たちに示してくれました。

その結果は2つの理由で心温まるものでした。まず、ワークショップには17名の参加希望者があり、そのうち15名が実際に参加したこと（うち2名は病気のため欠席）、そして彼らのほとんどが20代、30代だったことです。その中から、砂連尾さんがメソッド・トレーニングに適している数名を指名しました。

ワークショップの会場、音響機器、そして進行までを、地元のアップサラス・アーツ（インド古典舞踊カンパニー）に無償で提供していただきました。この団体の高齢ダンサーはダンス・セラピーに精通しており、〈とつとつダンス〉にご協力いただいたことも自然の流れのように感じました。

ワークショップを企画し、多くの人を集め、共通の目的のもと異なる分野の才能溢れる方々と働いたことは、とても大事な経験となりました。日本での研究結果や成果をもとに、シンガポールでも<とつとつダンス>プログラムを展開したいと考えています。

そのためには、まずワークショップの進行を任せられるパフォーマンス・アーティストの育成に力を注ぐ必要があります、その取り組みの開始を楽しみにしています。

オードリー・ペレラ (プログラムマネージャー/シンガポール)



1 ディメンシア・シンガポールについて

ディメンシア・シンガポールは1990年、増加する認知症コミュニティに対し優れたサービスを提供し、認知症についての認識を広め、偏見をなくすためにアルツハイマー病協会 (Alzheimer's Disease Association) として創立しました。今では認知症ケアに特化したシンガポール随一の社会福祉機関となっています。当機関は認知症者とそのご家族のニーズに寄り添い、能力向上、情報提供、コンサルティングを通じて認知症コミュニティの自律的な力を引き出し、また当事者目線のケア改革の実現を目的としています。

それらの実現のため、ディメンシア・シンガ

ポールは認知症コミュニティと彼ら独自のニーズと向き合い、支援の改良方法を常に模索しています。アートを基礎としたプログラムは認知症患者の心身の健康をサポートし、思考する力を鍛え、心理面でも良い影響を与えています。活用されていますが、達成感を感じられる手芸工作だけではなく、ダンスもまた実際に認知症の影響を遅らせることが確認されています。音楽と体の動きを組み合わせる自己表現は、身体的、感覚的、感情的、そして社会的レベルでの健康、安定、そして現実世界との繋がりを育みます。私たちのケアセンターで提供するクリエイティブ・アーツ・プログラムの成功は、こうした利点を証明する更なる裏付けとなるでしょう。

この点もまた、<とつとつダンス>の取り組みに魅力を感じる点です。<とつとつダンス>が「深いレベルでの繋がり発見、および育み」を主軸に据えることで、ある課題が難しい、あるいは不可能だと感じる日でも、認知症者とそのケアラーの間でより親密なやり取りが生まれるのです。

2 目的と可能性

<とつとつダンス>がより深い繋がりを生む可能性があるという点と私たちが考える一つの大きな理由として、その即興的なアプローチがもたらす個人間のコミュニケーションにあります。つまり、動作に正誤はなく、また覚えるべきステップもないという点です。ディメンシア・シンガポールの役員の1人チェン・シーリン博士は、その代わり、<とつとつダンス>のメソッドは「信頼」に基軸をおいたエクササイズによって親密なコミュニケーションを促している、と言います。また「他者と関わり合う新しい方法を見出す余地を患者に与えます。それは彼らが決断力不足や不安と向き合う際、特に有益です」と付け加えます。

プラスの作用は一朝一夕に明らかになるものではないですが、患者が心理的に難しい週を過ごし、その場の雰囲気や気分が通常のようにエクササイズに取り組めない場合でも、<とつとつダンス>が彼らの興味を引き出す場面を確認することができました。別のケアラーは、「(言語ではなく)身体的、および非身体的な接触によって、またそ

れが患者に与える影響を通じて」患者と心を通わせることができた、と評価しました。

3 ローカル コミュニティとの利点

<とつとつダンス>によって、現地のアート・コミュニティとの新しい関わり方を発見したこともまた明白な成果です。ダンサー、ミュージシャン、サウンド・アーティストから映像作家まで、これまでにない方法でのコミュニケーションが始まりました。彼らとのコラボレーションは更に広いコミュニティを巻き込み、会話を生み、認知症に対する偏見を払拭することに一役買うのではないかと期待しています。

ドン・メンドーザ（アドボカシー&コミュニケーション・シニアマネージャー／ディメンシア・シンガポール）

● プロフィール

セシリア・チャン（Cecilia Chan）

ジェロントロジスト（老年学博士）。数々の高齢者福祉サービスや施設のコンサルティングを行う一方、認知症者や家族、介護者のサポートのための地域支援グループ「Living Beyond Dementia」を立ち上げ、認知症の理解のために活動している。現在はバガン病院高齢者ケアセンター勤務。ティラズ大学講師。

オードリー・ペレラ（Audrey Perera）

シンガポールを拠点とするアートフェスティバルのプロデューサー兼ライター。2018年、シンガポールで開催された日本財団主催のトゥルー・カラズ・フェスティバル（TCF）のディレクターを務めた。20カ国以上から200組以上の障害のあるアーティストが出演し、1万人以上が来場した。現在は日本でのTCFのアドバイザー、エグゼクティブ・プロデューサーを務める。シンガポールの伝統芸能カンパニー「アプサラス・アーツ・シンガポール」と「ナディ・シンガプーラ」の理事も務めている。

ドン・メンドーザ（Don Mendoza）

シンガポールの社会福祉機関ディメンシア・シンガポールのアドボカシー&コミュニケーション・シニアマネージャー。ディメンシア・シンガポールは認知症ケア、介護者支援、トレーニング、コンサルティング、アドボカシーにおいて、シンガポールをリードする。

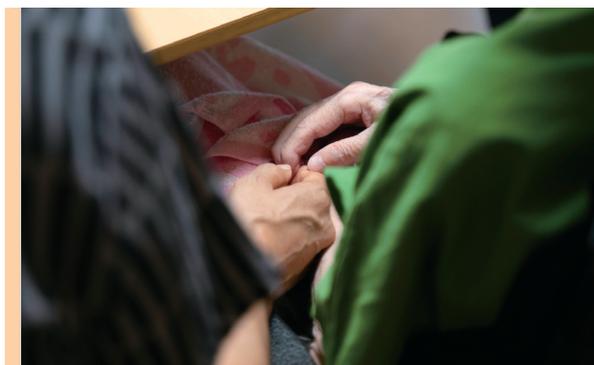
鹿児島での視察と ワークショップ&レクチャー

2023年度は、日本国内での活動を充実させることにも力を入れてきた。その一步として鹿児島で、ホームホスピスなど複数の施設を視察。施設の特徴やそこに住む・通う方々にあった<とつとつダンス>開催に向け動いてきた。ここでは、私たちスタッフがみてきた施設やワークショップについて紹介する。

● 9月 初めての鹿児島視察とレクチャー & ワorkshop

1 ホームホスピスもくれんの家

終のすみかとしてのホームホスピス。偶然居合わせた利用者の斜め横に砂連尾さんが座り、手の指や足先で、じっと静かに、二人だけの”ダンス”が繰り広げられた。



日時 9月22日 場所 日置市
参加者 5名

2 ひらやまのお家 (株式会社いろ葉)

外の様子がよく見える大きな窓、間取りが特徴的な「お家」。盛大なお出迎えを受け、急遽、ワークショップを開催。

日時 9月23日 場所 南九州市 参加者 15名

3 妙行寺門徒会館

公募で集まった介護関係者をはじめとする一般向けのレクチャーとワークショップ。横一列に並び、できるだけ時間をかけて会場の端から端まで歩くなどを体験。経験を話しあった。

日時 9月22日 場所 鹿児島市 参加者 40名

* 9月の視察では、上記のほかにも複数の施設見学を行った。
あおぞら東千石 (鹿児島市) LL さねかた (鹿児島市)、特別養護老人ホーム七福神 (鹿児島市)



● 11月 施設で本格的なレクチャー & ワークショップ

1 あおぞら東千石

市内中央部に位置するビルにある施設。参加人数が多かったため、砂連尾さんはホワイトボードを使いながら説明。介護職員さんも巻き込み、ペアになって5分かけて握手する、手を触れそうで触れない位置で動かすなどのワークショップを展開。

日時 11月2日 場所 鹿児島市

参加者 20名（認知症高齢者・介護者）



2 LLさねかた

一軒家と小山のある、地域密着型・通所デイサービス。ハーモニカが得意な利用者と、砂連尾さん、石田さんを中心に屋外でじっくり会話する。周囲では製材作業する利用者がいたり移動販売の八百屋さんに来たり、リラックスした雰囲気。

日時 11月3日 場所 鹿児島市

参加者 5名（認知症高齢者・介護者）

3 ふあん2テラス七福神

静かな住宅街に位置するグループホーム。介護スタッフの方々も交え、ペアで向かい合い、手を触れそうで触れない位置で動かしかうなどのワークショップ。

日時 11月3日 場所 鹿児島市

参加者 20名（認知症高齢者・介護者）



4 妙行寺門徒会館

9月に引き続き、妙行寺で一般参加者向けのワークショップを開催。海外でのアーティスト向けワークショップに用いたキーワードを元に、身体を動かしてみたり、「まったく脈絡のない会話を続けてみる」などのワークをグループで行った。

日時 11月3日 場所 鹿児島市

参加者 30名

写真：馬場光太（4の妙行寺門徒会館を除く）

エッセイ

<とつとつダンス>の鹿児島での展開には、UD ラボ合同会社のコーディネーターが欠かせなかった。各施設の紹介をはじめ、一般向けワークショップの会場として妙行寺門徒会館を紹介していただいた。ここではUD ラボ合同会社の代表の堤玲子さんとスタッフの足立さとみさん、妙行寺の井上住職にエッセイを書いていただいた。

● UD ラボ合同会社

とつとつダンスは 受容の木

弊社は、要介護者をケアしながら旅行に付き添う仕事をしている。顧客の半数が「認知症」と診断された高齢者だ。日本における認知症高齢者の数は、2012年に462万人と推計されており、2025年には約700万人、65歳以上の高齢者の約5人に1人に達することが見込まれている。[※]

今回、<とつとつダンス>を鹿児島の介護関係者に紹介するためのコーディネーターという役目を担ったが、紹介するにあたり、<とつとつダンス>をどのように言い表せば良いのか、表現にとっても困った。認知症という症状は、ケアに手がかかると思われがちである。その上、<とつとつダンス>は、起承転結のない、着地点のない表現である。およそ一般的なダンスとかけ離れているからだ。

ダンサーで振付家の砂連尾氏は、<とつとつダンス>を踊るとき「横にある植物でありたい」と表現した。その木があることで、認知症高齢者は、「生（生きる）」を安心して表現し始める。呼吸のダンスが始まる。たとえていうなら、受容の木。とつとつダンスを観おえた私は、毎回、静かに泣いてしまう。魂が浄化されるような気がするのはなぜだろう。たくさんの介護関係者に観てほしいダンスである。

[※] 厚生労働省認知症施策推進総合戦略（新オレンジプラン）より

堤玲子（UD ラボ合同会社代表、
<とつとつダンス>鹿児島コーディネーター）

「人の全ての細胞はダンスを踊りたがっている」と語った砂連尾氏。介護する側／される側で異なる細胞のリズムは重なるのだろうか。認知症の方からより純粋に細胞のダンスが現れ、人を越えて重なっていく。<とつとつダンス>は、ダンスというアート文脈の奥深さを改めて感じる時間だった。

足立さとみ（UD ラボ合同会社スタッフ、
<とつとつダンス>鹿児島コーディネーター）

● 妙行寺

とつとつダンスの ワークショップを体験して

寺院が地域の方にとって「安心できる拠り所」でありたいという願いから、医療・福祉等の学びや集いの場づくり、相談の場作りを重ねて、「安心できる居場所づくり」を重ねてきた。そのことから、今回のワークショップのご縁をいただいた。

9月に開催したワークショップでの最初の「会場の端から端まで列になってひたすらゆっくり歩く」という体験。はじめは前を歩く人の足ばかりを見つめ、その距離ばかりが気になっていたが、徐々に畳を踏みしめる足の裏の感覚、聞こえてくる様々な音たち、周りの人の吐息など、たくさんの「命の鼓動」につつまれて、私は今ここにいるなあということを感じるようになった。こうなったら、あとはワークショップの中で「何」に気づき、「何」を得られるのか楽しみでなりません。人と人が一緒にいるときの「距離」がどれほど私たちの「気持ち」に大きく影響を与えているか、とかく簡単に考えがちな「呼吸を合わせる」ことがどれほど難しく、それゆえにどれほど尊いことか。日頃は何気なくやり過ごしている一つひとつを、このワークショップを体験することによって、そこに大切な宝物が溢れていることを気づかされた。この時間を通し、認知症者に限らず、人とともにあることの尊さを改めて思わせていただいた。長い歴史の中で、人を尊び、命を敬う気持ちがあふれている「寺」という場所がこの人としての大切な気づきを後押ししてくれたような思いもしている。

井上従昭（妙行寺住職、<とつとつダンス>
ワークショップ開催協力・会場提供）

● プロフィール

堤玲子

UDラボ合同会社代表。2015年外出同行サービスとして鹿児島で起業。個人の外出から、施設のシニアツアーのプランニング、添乗業務まで。「高齢者に外出の機会を！ヘルパー不足の介護現場に混合介護を！」と精力的に活動している。

足立さとみ

UDラボ合同会社スタッフ。NPO法人リスニングママ・プロジェクト代表理事として、オンラインで子育て中の母親への傾聴を行う当事者団体を運営する。コロナ禍、堤の外出できない人たちへの関わりに向けて相談され、UDラボではオンライン発信をサポート。その他、「受容・共感・尊重」が感じ取れる人と人のつながり、場づくりに向けて活動を続けている。

井上従昭

立教大学文学部卒業・中央仏教学院研究科卒業。前職のたにやま幼稚園では園長をつとめ、遊びを中心に、障害の有無にかかわらずどの子どもと一緒に育つ保育を実践。現在は浄土真宗本願寺派深機山妙行寺住職で、医療や福祉・葬送等の専門職との連携をはかりながら、地域の拠り所である寺院（地域包括ケア寺院）を目指して様々な活動を行っている。

2023年度活動報告会

活動内容や成果を共有する活動報告会を、東京都内で2日にわたって開催した。会場では映像展示を行いながら、今年度の活動に関わってきたアーティストとともに制作したパフォーマンスを計3回実施。活動内容やパフォーマンスを振り返るトークセッションを実施した。会場にはアートやダンスに関心のある方々を中心に、関東近郊で福祉や介護に関わる方も多く来場した。パフォーマンスの予約が殺到する時間帯もあり、関心の高さが伺えた。

※登壇者の詳細はこちら→



日時 2023年12月2日(土)・3日(日)

会場 東京芸術センター 2階 ホワイトスタジオ (東京都足立区)

鑑賞サポート 日本語字幕 (映像記録)、日英文字支援 (パフォーマンス)、
日英通訳・手話通訳 (トークセッション)

来場者数 202名

内容

● これまでの活動に関する映像記録

- ① 「<とつとつダンス> 2023 Malaysia-Singapore」撮影・映像編集 馬場光太
- ② 「<とつとつダンス> 2023 鹿児島」撮影 馬場光太、制作チーム
- ③ 「<とつとつダンス> 2009-2015」映像 久保田テツ

● トークセッション 2023年度の活動報告

出演 オードリー・ペレラ、オクイ・ララ、神村 恵、砂連尾 理、豊平 豪

● パフォーマンス

参加アーティスト 石田智哉、オクイ・ララ、神村 恵、砂連尾 理

ワークショップ協力 Dementia & Co.

テクニカルディレクター 尾崎 聡 / 照明 藤原 康弘 / 映像・音響 吉田 佳弘 (Edith Grove)

映像オペレーション 酒井 陽佑 / 映像編集 馬場光太、オクイ・ララ / 上演時間 60分

2023年に現地でワークショップを行ったシンガポールの認知症者とケアをする家族2〜3組とのzoomから始まるパフォーマンス。砂連尾と神村2人のダンサーの身体パフォーマンスを中心に、言葉を使いインタビューをしあう場面や、2023年のマレーシアでの活動に参加したオクイ・ララの詩の朗読、同じく同年の鹿児島での活動に参加した石田智哉の語りと身体表現なども盛り込まれた。さまざまな表現を使いながら、<とつとつダンス>の活動自体をも表現する試みだった。



● トーク・セッション

2023年12月3日(日) 15:15 ~ 17:15

出演 オードリー・ペレラ

(コーディネーター/シンガポール)

オクイ・ララ (現代美術家)

神村 恵、砂連尾 理

司会進行 豊平 豪 (torindo)

トーク・セッションでは、今年度のワークショップの様子や活動報告会で行ったパフォーマンスの制作プロセスについて、参加アーティストの砂連尾理、神村恵、オクイ・ララから話を伺い、特に神村、オクイからは、〈ととつとつダンス〉体験後に自身の創作活動にどのような影響があったかを共有いただいた。また、シンガポールでコーディネートを担当したオードリー・ペレラに、シンガポールでの認知症ケアとアートの現状について簡単に解説いただいた後に、〈ととつとつダンス〉を受け入れるにあたっての受け入れ先の選定理由やシンガポールでの〈ととつとつダンス〉にこれから期待することを伺った。

セッション後半では、参加者からのマレーシア、シンガポールにおける認知症ケアの状況やケアに関連したダンスやアートについて積極的な質問が数多く寄せられ、今年度の活動について多くを共有することができた。



写真撮影：西野正将

<とつとつダンス>の未来

<とつとつダンス> 2023年度活動報告会は映像展示とパフォーマンス、トークセッションを組み合わせたものだった。舞台芸術の研究者である宮下寛司さんに<とつとつダンス>について執筆いただいた。

<とつとつダンス>の活動報告会におけるワーク・イン・プロGRESSは、砂連尾理だけではなく神村恵や石田智哉、オクイ・ララといった異なる背景を持つ多様なジャンルのアーティストたちからなるパフォーマンスであった。一方でそこで実際に舞台上に上がらなかったのは（オンラインでの中継はあったものの）認知症の方々であった。この対比によって、ダンスという身体的芸術がいかにして独自の倫理的応答を示しうるかというこのプロジェクトが見据える課題が垣間見えたと感じた。

冒頭において砂連尾と神村は4つのタスクを展開する。これまでの経験を用いたこれらのタスクは、砂連尾らがさまざまな人たちと触れてきた身体的な記憶を技法として写し取ったものでもある。そのためにこれらのタスクは、むしろ明確な意思疎通の手前にあるような身体的コンタクトの光景のようにみえる。またこの光景は実際のエピソードを再現したような身振りでないために抽象的でもある。そのためタスクの遂行によって、私たちは過去を生き生きと経験できないが、一方で身体的コンタクトの繊細な現場をその都度新しく経験できる。身体的技法としてのタスクによって構成されるパフォーマンスの空間において、身体的に不在であり続ける認知症の方々へいくらか接近可能になる。その際私たちは不在である人たちへ近づこうとする想起を続けると同時に、（タスクの遂行とはその都度現れ方が多様であるように）個々人との出会いは偶然的であり、おそらく交流の継続も容易ではなく不安定であることにも思い至る。

このパフォーマンスは単なる想起の場に留まらず、舞台に上がるさまざまな人たちとの出会いの場でもあった。規範化された身体技法ではない方法で私たちは他者の身体を観て声を聴くことができるからである。さらに言えば、今ここにいる人そして潜在的に出会いうる人たちのための場でもある。それゆえにもはや砂連尾個人の追憶が表現されたダンスとして観ることから離れていくよう

にも思われる。それは、出会いをどのようにダンスの作品にするのかではなく、ダンスを通じてどのような出会いの瞬間を創造できるのかという創作上の問いへの移行として捉えられる。ダンスが持ちうる倫理的な姿勢とは、この問いに応えようとすることであり、他者との身体的な出会いの場を見届ける状況を、たとえどれだけ不安定で限定的であったとしても、つくろうとすることではないだろうか。

宮下寛司

● プロフィール

宮下寛司

慶應義塾大学文学部・多摩美術大学演劇舞踊デザイン学科等非常勤講師。慶應義塾大学大学院後期博士課程単位取得退学。専門は日欧の現代舞踊およびパフォーマンス。現在はドイツ語圏における舞踊学や演劇学の知見をもとに、現代舞踊およびパフォーマンスにおける「主体化」についての博士論文完成に向けて執筆中。主な論文に「舞踏文化を動かすには：川口隆夫と田辺知美の『ザ・シック・ダンサー』における踊る主体と観客の視線」（平田栄一朗、針貝真理子、北川千香子共編『文化を問い直す』彩流社、2021年、141-162頁）。

活動報告会参加者コメント (一部抜粋)

「砂連尾さんがどんな場面でも瞬時に相手にゆだねていけるその早さをいつもおもしろがってみたいです」、という神村さんの一言。なるほど、そうだなあと思いました。

福祉・医療関係者

体験したことをダンスにまとめているところが関心した。映像も美しく印象的だった。

学術研究・専門技術者

「認知症者と介護者と第三者との関係を探る試み」なんだと少し驚いたのですが、さいごの物と人が同じ形になったり、石田智哉さんの朗読やオンラインで出演されていたアリンソンさんとキットさんの関係性など全部が↑の言葉に集約されていておもしろかったです。

福祉・医療関係者

認知症の方に対して「やらせる」ではなく「引き出す」というのが見えても心地よかった。私もやりたいと思った。(引き出してもらいたい)

小学校教員

一人ひとりの時間を感じた。映像になっていない時間を思った。はかなさ？不安？息がつかまるような、安心するような気分になった。

アート関係者

人に触れること、人との距離感を認識させられるパフォーマンスと動画でした。分かり合えないなりに分かろうとすること。私はこのことをいつもあきらめがちなので他人を信用しないことで自分を守っているのですが、今日のパフォーマンスで温かい希望のようなものを感じました。ありがとうございました。

学術研究・専門技術者

印象的なシーンが沢山あります!!たとえば、石田智哉さんの朗読にあった「見ること」による体験感覚の話は大変に新鮮でした。ピープル・リビング・ウィズ・ディメンシアという言い回し(他の病気や障がいも含めて共生ということかと)も興味深かったー

高齢者と暮らす主婦

ものすごくおもしろかったです。自身も同じ場を共有する者として存在できて、ほんとうにHappyでした。石田監督の作品も非常に印象に残りました。ただ、このプロジェクトは砂連尾さんがいてはじめて成り立つものか、と考えました。

日本語教師

リアルと配信のパフォーマンスにおけるお客さんの距離というのを考えていたのですが、今回のパフォーマンスにはさまざまなメディアの視聴形態が全部入っているのではないですか!実は今、最もハイテクなパフォーマンスの一つなのだと気がつきました。

舞台関係者

アーティスト・エッセイ

2023年度は<とつとつダンス>をアーティストたちとともに作り上げることを意識してきた。今回は、石田智哉、神村恵、オクイ・ララの3名に、それぞれの<とつとつダンス>について執筆していただいた。

モノの「こだわり」を介して、 その人と出会う

今年度は鹿児島を実際に訪れ^{※1}、活動報告会にパフォーマーとして参加した。鹿児島ではこれまでなかった「場をともにすること」で生まれる反応に触れた。特に次の2つの施設で出会った方々とは時間をかけて交流した。

あんまあの家。豚汁とおむすびを囲んだ談話。隣の女性がおむすびを食べながら、ふと車椅子テーブルに置かれ小分けられたおむすびをチラリチラリと見ている。女性は半分ほど食べたおむすびを自身の皿に移す。もう一つと大皿へと手が向かうのかと思ったら女性と目が合った。「その小さなおむすびが食べたい」と求める目力。彼女の中で「このおむすび」になっている。車椅子テーブルのおむすびは包まれたビニールのみになった。こう書くと女性におむすびを「とられた」ようだがこのひと時に、最も彼女と向き合い通じあった気がした。初対面で「私のこだわり」をぶつけてくれたことに心が満ちていた。周りには食器だけでなく、紙ティッシュ、ゴミ入れなど、「〇〇さんの」と書かれたモノがあった。効率的なケアでは省略されがちな日用品が「このモノ」となり、「〇〇さんのティッシュ下さい」といった会話が何度もあった。女性とのこの交わりはダンスと言えないだろうか？

LLさねかた。ハーモニカ演奏が得意な男性と出会った。砂連尾さんがみかん、コート、ポットなどのモノを男性に手渡し、会話する。しばらくしてその輪に近づく。「演奏はちょっと待ってね」と呟く男性。自分の茶色い棒^{※2}を男性に手渡すと棒の木目を指で丁寧になぞっていた。今度は男性のハーモニカを受け取った。どこに手を当てるのか、息を吹き入れるのか、初めて手にとりじっ

くり触れた。モノを通じた交流を終え、棒とハーモニカがそれぞれの所有者のもとに戻る。水色のハーモニカは見知らぬ人のどこかぎこちない触れ方に戸惑っていたが、男性の元に戻り指の当たり方がしっくりときている感じがした。その人の身につけているモノとの交流は顔を見合うときよりも緊張したのが不思議だった。小一時間して帰る間際、その男性からプレゼントをもらった。



活動報告会では舞鶴のオンラインワークの女性の動きから広がったエピソードを朗読した。これまでは観察し湧きあがったことを書(描)いていたが、この朗読は「とつとつ」をしている感覚に連れていってくれたことも記しておきたい。

石田智哉 (映画監督)

※1 2022年度は、体調を鑑み、遠隔操作ロボット OriHime で自宅から活動に参加した。

※2 エレベーターのボタンを押したり、電動車いすの操縦レバーの操作補助具として石田が使っている。

既にあること、 できていること

2023年度の<とつとつダンス>では、7月31日から8月11日にかけてのマレーシアとシンガポールのツアーに参加。認知症高齢者、その家族、ケア提供者、パフォーミングアーティストなどを対象に、砂連尾さんのアシスタントとして、多くのワークショップをおこなった。

どの土地のワークショップでも、それまで動きや発話をしなかった高齢者が、参加するうち、生き生きと動いたり話し始めたりするなど変化する様子を目のあたりにした。

たとえば、マレーシア北部、バターワースにあるバガン病院のケア施設では、普段は歩くことに不自由を感じている女性が、ワークの中で自然と、砂連尾さんとデュオダンスを踊ってくれ、彼女の滑らかで堂々とした動きに皆が魅了された。太極拳やダンスなどの経験があるのだろうかを尋ねてみると、「自分は料理をしてきただけだ」という答えが返ってきた。

生き生きと動いていたどの高齢者の方も、突如としてそのような動く能力を身に付けたわけではなく、自分がかつとも行ってきた動き、備わっている動きのイメージを自然と思い出して、それを出現させているように見える。

<とつとつダンス>では、一つひとつのワークに十分時間をかけたり、相手に働きかけつつも“待つ”という態度を徹底したりすることが、このような認知症高齢者の方の変化を結果的に引き出すことに繋がっていると思う。

また、クアラルンプールのテイラーズ大学でのワークショップで、参加者それぞれに“<とつとつダンス>的”なエクササイズを考えてもらうワークを行ったとき、強く印象に残った例がある。

高齢の母親を自宅で介護しているという女性がドロイングとともに示してくれたワークは、足が不自由な母親が毎朝2階の自室から階段を座りながらゆっくり降りてくるというものだった。

歩いて降りられないから座って降りるしかない、ネガティブな代替行為だと普通は捉えてしまうだろうが、母親自身がその動きを楽しんでいることをその女性は見取り、その動きにある種の美しさを見いだしたのだろう。

できないことではなく、既に達成されていることに光を当て、それを味わい、楽しむという、<とつとつダンス>の重要な側面を、その女性から教えられた気がした。

とつとつ的なその視点は、高齢者をケアする人々、取り巻く人々をも、あるべき正しさを目指すことから解放し、互いにより楽でいられる関係を作る方法を、示唆してくれるように思う。

神村恵（ダンサー／振付家）



<とつとつダンス>と

時間

<とつとつダンス>チームに初めて参加したバガン病院でのワークショップで、私たちはそれぞれのパートナーにゆっくりとマッサージを施すという課題に取り組みました。私はリムおばさんの手を優しくマッサージしながら、動作を遅くしようとすると、自分の親指が宙に浮くことに気づきました。ゆっくりとしたペースに慣れるまで、私の動作はためらいがちで、ぎこちないものでした。それに対し、リムおばさんはこの課題をごく自然に行います。私の掌の上をゆっくり、優しく滑っていきます。同じ課題をパートナーを変えて、ワークショップの他の参加者である認知症の方々、医師、ナース、ケアラー、そして<とつとつダンス>のメンバーと実施します。どの方のマッサージもそれぞれ違うことに気がつきました。ある人はしっかりと圧をかけ、ある人は雲のようにそっと手に触れるものでした。こう気づいたおかげで、私は自分のぎこちないマッサージも受け入れることができました。

ただし、<とつとつダンス>で過ごした時間は必ずしも「ゆっくり」としたものではありませんでした。ディメンシア・シンガポールでのワークショップでは、神村さんと砂連尾さんにガイドされ、認知症の方々と一緒にビデオを作るワークショップが開催されました。皆がそれぞれ手を振ったり、足踏みをする中、撮影モードのスマートフォンがみんなの手から手へと回されていきます。ダンスが終わり、録画を皆で見直します。ビデオを介して、さまざまな動作をカメラの視点から見ることができます—震え、揺れ、叩かれ、またレンズを覆う無数の指も現れます。この指には包まれるような感情と赤ん坊になったような気持ちが呼び起こされました。まるで自分がベビーシートに座り、周りの皆さんがハンドジェスチャーで私をあやしてくれているようでした(ビデオスチル1参照)。この日、ずっと眠たそうな女性がいましたが、このエクササイズの際にはカメラを手に元気よく動いておられました！そのカメラは上下、上下、と繰り返し動き、ビデオの中に

上下に揺れる私たちの姿も収められています(ビデオスチル2参照)。



ビデオスチル(1) 参加者で作った動画より



ビデオスチル(2) 参加者で作った動画より

このビデオは、私が2023年に見た最も美しい動画のひとつとなりました。砂連尾さんが、戦後のダンスムーブメントにインスパイアされた、と前置きして口にしたことを思い出します。「もっとも自然に踊るにはどうしたら良いのでしょうか？」これは私が動画を制作する際に立ち戻る質問と同じものです。「ビデオの中でもっとも自然に存在するには、どうしたら良いのだろうか？」こうした経験から、「自然」というコンセプトは千差万別であることを理解するようになり、また「自然」が喚起されるには、時に不自然な何かが必要なのだとも理解するようになりました。

東京での2日間のパフォーマンスと時間の共有の間、私たちのディスカッションや会話は主に認知症と高齢者ケアを中心としたものでした。どちらも日常では滅多に触れないテーマです。私も自分自身の家族をサポートした経験を振り返り、家族のケアのために自分の日常から時間を削らなくてはならなかったことを思い出しました。忍耐

強くあり続けることは決して簡単ではなく、私もそのリズムに順応するまでに時間がかかりました。時に、周囲とは全く違うタイムゾーンにいるような気にもなります。

<とつとつダンス>に参加したあと、私は「普段よりも随分とゆっくりと喋るようになる」とよく自分のチームメンバーに言います。そう口にしなが、普段喋るスピードの方が速いのだ、とも気づきます。もしかしたら、私が<とつとつダンス>の経験を時差ボケと例えるのには、この感覚が関連しているのかもしれませんが。違うタイムゾーンを超える際に生じる、自分の現在地を見失う感覚と似て、現在に身体を合わせるのには幾らかの時間がかかります。こうした移行的な、一時的な調整の時間の中で、私たちは「普段の自分」を見出すのでしょうか。

オクイ・ララ（現代美術家）



● プロフィール

神村 恵（かみむらめぐみ）

ダンサー・振付家。2004年よりソロ作品を発表し始め、これまで、イタリア、韓国、インドネシア、フィンランド、英国などを含む国内外の様々な場所でパフォーマンスを行う。近年は、言葉と動きの関わりに関心を持ち、それらの間で変換を行う仕組みを利用した作品などを制作。

石田 智哉（いしだともや）

映画監督。筋ジストロフィーによる電動車椅子ユーザー。立教大学現代心理学研究科修士課程卒業。中学生の頃、自分に合った学習方法としてiPadを紹介され、そこでの短編映像の制作をきっかけに映像制作に興味を持つ。ボランティアサークル「バリアフリー映画上映会」実行委員を務め、上映会の企画・運営を行う。初監督作品「へんしんっ！」がびあフィルムフェスティバル「PFF アワード 2020」グランプリを受賞。

オクイ・ララ（Okui Lala）

マレーシアを拠点に活動するアーティストであり、カルチャーワーカー。彼女の活動は、ビデオ、パフォーマンスからコミュニティへの参加まで多岐にわたり、家事や職業、労働のパフォーマンスを通して、移民、故郷、帰属というテーマを探求している。また、様々なコミュニティ、組合、NPOと共同でコミュニティ・ビデオ・ワークショップのファシリテーターも務める。日本での過去の発表には、さいたまトリエンナーレ（2016年）、フェスティバル/トーキョー（2019年）、山口情報芸術センター（2019年）でのショーやイベントなどがある。

ウェブサイト：okuilala.com

2023年度<とつとつダンス>

参加者アンケート

ワークショップ開催にあたっては聞き取りを中心に調査を行った。マレーシア、シンガポールで得られたコメントの一部は先に掲載した。鹿児島で2回開催した一般向けレクチャー・ワークショップ、東京で開催した活動報告会ではアンケート調査を実施した。

● 5段階アンケート（母数164）

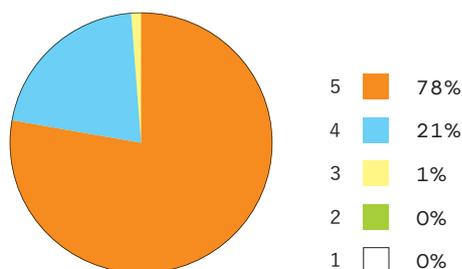
※ 5段階評価

■ 評価5（非常に良い） ■ 4（良い） ■ 3（普通）

■ 2（あまり良くない） □ 1（良くない）

(1) 今回参加した<とつとつダンス>

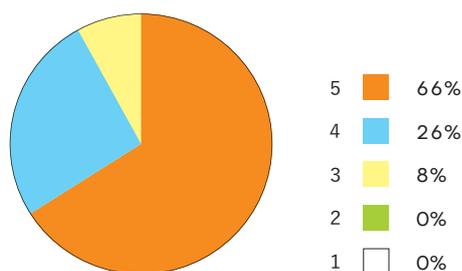
ワークショップはいかがでしたか？



(2) <とつとつダンス>に参加して

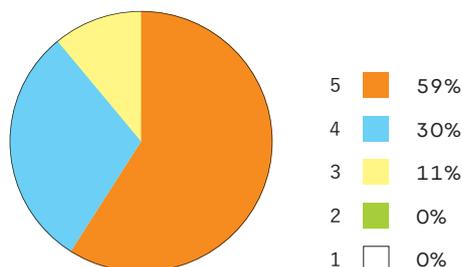
今後のケアや活動の参考に

なりましたか？



(3) これからの<とつとつダンス>に

今後も期待しますか？



自分の身体や周りとの触れ合い、関わりを、今までよりももっと意識できるようになった気がします。同じ事象に対するいろんな人の話を聞くことにも新しい発見があり、とても楽しかったです。ありがとうございました！

理学療法士

職業柄、認知症の人と話すことが多いが、認知症の人は理解力がないと決めてかかり、向こうからの話を真剣に聞かず、こちら側の話を押し付けていることになるのだと気づきました。また、握手よりも手を重ねると相手の気持ちを察することができるように思えた。

医師

言葉を使わず、目と目を合わさず、ダンスができることに驚きました。そのためには身体障害者とか認知症者とかの枠を外して接することが大切と分かりました。それが大変なことなんです。

介護職

初回でしたので、まずは私自身が、人とのコミュニケーションについて取りこぼしていたことが多々あることを知らされました。最後にもっと時間をとって、他の参加者と意見を共有出来たらよかったなと思います。これからはじまりを期待させる内容でした。

住職

言葉にならない、曖昧さ、わからなさをそのまま誰かと戸惑いながらも一緒に五感で感じようとするのは、決して嫌な感覚ではなく、むしろ、自分がただここに在るということを受け入れられているみたい、あたたかい安心感がありました。人として生きていく上での一番根っこの土台じゃないかと思うし、そこがすべての出発点になるといいなと思いました。

音楽療法

おわりに

<とつとつダンス>2023から見えてきたこと

昨年度のマレーシアでの展開まで、<とつとつダンス>は京都府舞鶴市にある特別養護老人ホーム・グレイスヴィルまいづるでその活動を主に行ってきた。この間、グレイスヴィルまいづるでの高齢の方々とじっくり関わり続けたことで、現在に至る方法論を生み出していった。一つの施設でじっくり、それこそ伸び伸びと活動に取り組めたことが<とつとつダンス>の方法論を熟成させた一方、その言語化、理論化には少々無頓着な側面があったように思う。

そんな<とつとつダンス>が昨年度からマレーシア、そして今年度は新たにシンガポール、また国内においても鹿児島へと、その活動を急激に外へと展開していった。一つの施設でじっくり育てたこの活動がさまざまな土地、また言葉を超えて交流を生み出すものへと広がっていったことは嬉しい出来事だったが、さまざまな人と接していくことで、「<とつとつダンス>とは一体何なのか?」「このワークで私は一体何をしているのか?」といった根本的な問いに立ち返ることにもなっていった。

そんな問題意識のもと、今年度はワークを実践しながら、この活動を共に作り上げてきたプロデューサーの豊平と対話を重ね、<とつとつダンス>の言語化に取り組んでみた。それと並行して、マレーシアの現代美術家であるオクイ・ララの協力を得、ワークに帯同してもらいながら外からの視点としてここで起こっていることを言葉にして投げ掛けてもらった。それらの取り組みの中、「息を合わせる」、「距離を測る」、「目を合わせる」、「手を合わせる」といった4つのキーワードが生まれた。さらに、そのキーワードだけでは説明しきれない感覚をダンサー・振付家の神村恵と共に身体表現へと変換していった。このようなワーク、言語化、身体表現といった循環を何度も繰り返しながら、昨年12月に前述のオクイ・ララに加え映像作家の石田智哉らと協働し、<とつとつダンス>を巡る思考をパフォーマンスへと昇華させた。

一連の作業を経て、私を中心として活動していた<とつとつダンス>が、さまざまな人たちと関わったことで、高齢者へのケアだけでなく、他者と関わること、また生きることを思考し、実践していくメディア、場としてより多くの人に開かれてきたのではないかと思う。次年度は昨年創ったパフォーマンスをもとに、ワークをしあう関係だけでなく、それぞれの土地の人たちにパフォーマンスのパフォーマーとしても参加してもらいながら、ワークを通じた活動の普及や人材育成、更にはこの活動の未来に向けた継承の在り方についても考えていきたいと思っている。

砂連尾 理 (ダンサー／振付家)

● 参加アーティスト

砂連尾 理、神村 恵、石田智哉、カマル・サブラン、オクイ・ララ、モハメド・ヤジズ・モハマド・ハッサン

● 映像制作・撮影

馬場光太

● 報告展示会トークセッション・

パフォーマンス撮影・編集

遠藤幹大

● 報告展示会チラシデザイン

横田法哉

● 翻訳

石居 萌、久米明子

● ワークショップ・コーディネーター

久貝京子、セリシア・チャン（マレーシア）、オードリ・ペレラ（シンガポール）、堤 玲子、足立さとみ（鹿児島）

● 制作統括

豊平 豪

● 制作

横田紗世、和田真文

● 広報

関 萌美

● 主催

文化庁、一般社団法人 torindo



torindo

● 協力

西川 勝、特別養護老人ホームグレイスヴィル まいづる、立教大学現代心理学部映像身体学科、マレーシア・テイラーズ大学、バガン病院 高齢者ケアセンター、ファイブアーツセンター、Dementia Singapore、Dementia & Co.、アブサラス・アーツ、あおぞら東千石、ホームホスピス もくれんの家、LL さねかた、ホームホスピス あんまあの家、天祐会七福神、ひらやまのお家、妙行寺

● 関連リンク

一般社団法人 torindo

ホームページ

<https://torindo.net/>



Facebook ページ

[https://www.facebook.com/](https://www.facebook.com/series.totsutotsu)

series.totsutotsu



とつとつマガジン (note)

https://note.com/totsutotsu_dance/



<とつとつダンス>

YouTube ページ

<https://www.youtube.com/>

@totsu-totsudance9801



砂連尾 理

ホームページ

<https://www.jareo-osamu.com/>



<とつとつダンス> 2023 年度活動報告書

発行日 2024 年 3 月 25 日

発行 一般社団法人 torindo

編集 豊平 豪、和田真文、横田紗世

デザイン 垣内 晴

文化庁委託事業「令和 5 年度障害者等による文化芸術活動推進事業」
『日本からマレーシア、アジア太平洋へ～認知症患者・高齢者と介護者をつくる
「アートのような、ケアのような《とつとつダンス》』』

